

## 英語構文の生産性と英作文教育への応用

— 長崎大学 大学教育機能開発センター —

西原俊明<sup>\*1</sup> ・ 西原真弓<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>長崎大学 大学教育機能開発センター <sup>\*2</sup>活水女子大学

### Productivity of a Family of Resultative Constructions in English

— its Effective Use for Teaching English Expressions —

— Research and Development Center for Higher Education, Nagasaki University —

Toshiaki NISHIHARA<sup>\*1</sup>, Mayumi NISHIHARA<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup> Research and Development Center for Higher Education, Nagasaki University

<sup>\*2</sup> Faculty of Letters, Kwassui Women's College

#### Abstract

The present paper discusses and analyses the productivity of a family of resultative constructions in English. This paper also discusses some effective ways of teaching English expressions, using the ideas developed in lexical semantics in reference to verb semantics. The focus is placed on a lexical semantics, and semantic conflation mechanism. Through discussion, it will be shown that teaching English expressions with special reference to the ideas in lexical semantics, especially event structures, can shed new lights on teaching English expressions.

Key Words : verb semantics, semantic conflation, resultative constructions, productivity

#### 1. はじめに

英語には、(1)(2)に示すような結果構文が存在する。

(1) a. We walked the food off (with a shopping tour)

b. I walked my legs off.

(2) a. I shook him awake.

b. The dog barked the children awake.

(1)は、自動詞を含む結果構文であり、(2)は他動詞を含む結果構文である。(1b)では、「歩く」という行為を行った結果、「足が棒になった」という結果状態に至ったことを示している。同様に、(2b)では、犬が「吠える」という行為を行った結果、子

供たちが「目を覚ました」という結果状態が引き起こされている。

ここで注目すべき点は、自動詞を含む結果構文である。(1)の文では、自動詞を含み、本来は(3)が示すように、名詞句が動詞に後続することは容認されない。

(3) \*I walked my legs.

自動詞・他動詞という二分法的視点を強調しながら高校までの英語教育では自動詞を含む派生的結果構文は厄介な存在となり、授業で取り上げられることが少ない。また、その扱いにくさから英作文に応用されていないという現状がある。この現状は、英作文を課し、学生に問題の構文を応用

できるか等について試してみた結果からも見て取れる。

この論考では、結果構文の生産性に注目し、その派生メカニズムを理解することで表現力が向上することを明らかにしたい。また、結果構文の生成メカニズムは他の英語構文に拡張されることを示し、さらに英語表現力向上につながることを示したい。

## 2. 結果構文の派生

英語の結果構文の派生は、文に含まれる動詞が自動詞であれ、他動詞であれ、次に示す行為連鎖を含むと考えられる。

(4) <行為>CAUSE<変化>→<結果状態>  
という行為連鎖 (影山 編(2001: 169))

(4)の行為連鎖が意味するものは、用いられる動詞(自動詞、又は他動詞)の種類に関係なく、ある行為を経て変化が生じる対象が存在し、その対象の結果状態が記述されなければならないということである。(5)(6)から明らかなように、変化が生じる対象(変化の主体)、または、結果状態のいずれかを省略した場合、英文としては容認されない例になる。

(5) a. \*They danced tired.

b. \*They danced themselves.

(6) a. \*The dog barked awake.

b. \*The dog barked the children.

(影山 編(2001: 169))

また、(4)における<変化>→<結果状態>の部分には、become、あるいは get に相当する変化動詞が含まれていることに注意しなければならない。このことは、[x DO (y)]と[X CAUSE [y BECOME stage ]]の二つの意味が合成されていることを示している。二つの意味の合成は、(7)の例から支持される。

(7) a. I sobbed [to God].

b. I sobbed [my heart and soul out] [to God].

(4)における行為連鎖の理解に関しては、注意すべき点はいくつか存在する。まず一つめは、話者がどのように状況を認知し、動詞の意味がどの程度変化の主体に影響を及ぼしているかという点である。換言すれば、変化の主体となりうる名詞句はどのような種類のものかということである。

(8) a. They danced themselves exhausted.

b. She danced him exhausted.

(8)を例に考えると、動詞 dance の場合、変化の主体には、自分を含む場合と第三者の場合があることがわかる。次に、(9)の例を見てみよう。

(9) a. John talked himself blue in the face.

b. %John talked her blue in the face.

英語母語話者の場合、(9b)を容認する話者が存在することも事実であるが、容認しない話者が多いという事実がある。(8)の場合とは異なり、(9b)の場合、容認性が低くなると言える。

(8)(9)の例文の容認性の差異は、次のように説明することができる。踊るという行為が、パートナーを要する場合、話し手が踊るという行為によって、自分、もしくは相手を疲れさせるという状況を想定することは難しくない。他方、話すという行為の場合、話すことによって自分が疲れて顔の血の気がなくなるという状況は想定できるが、話すという行為が他者の血の気をなくすということは想定できない。このように、変化の主体は、変化が十分に起きうる対象として存在しなければならないことになる。つまり、話者が行為と結果状態に関して十分な CAUSE 関係を見いだせる場合、そしてその場合にのみ文が容認されることになる。

次に押さえておかなければならない事実は、結果構文に生じる結果述語自体にもある種の意味的制約があるという事実である。結果構文の場合、他動詞を含む本来の結果構文であれ、自動詞を含

む結果構文であれ、結果述語は、ある状態の極端な状態を表す(hyperbolic)述語でなければならない。状態の極端な状態を表す述語という意味は、(10)が示すように、形容詞だけでなく、前置詞句なども生起することを意味している。

- (10) a. She danced ten partners out of breath.  
b. Mary ran the soles off her shoes

ある極端な状態を表すという事実は、限定的で状態の終点を表すことにほかならない。つまり、事象の終点を表すアスペクト役割をもっていることになる。(11)は、事象変化の終点を表す代表的な例である。

- (11) blue in the face, sore, lame, horse, awake  
speechless, breathless, sore

(10)(11)に見られる結果述語に関する制約と関連して理解しておく必要があるのは、動詞に後続する名詞句(変化の主体)と結果述語の意味的結びつきである。

- (12) a. I talked my head / tongue off.  
b. He worked his ass off.  
c. He sang his heart out.  
d. I read my eyes out.

既に見たように、(4)で示した行為連鎖には、[x DO (y)]と[X CAUSE [y BECOME stage ]が含まれている。ここで言う stage は、事象変化の終点を示すステージレベルの要素を表す。stage 項は、ステージレベルの要素(一時的状態を表す要素)でなければならないことを規定している。したがって、y に本来的に備わっている属性とは異なる状態が意味的に選択されなければならないことになる。この指定は、(12a, b)では、off が選択され、(12c, d)では out を指定することになる。head, tongue, ass 等は、体の部位という属性をもつ。すなわち、体に接している対象であり、on の意味が兼ね備わっている。これらの名詞句が結果構文に生起する場合、この属性ではない状態変化を表さなければなら

ならないことになり、結果として、off が選択されることになる。同様に、eyes の場合は、in の状態とは逆の out の指定を受けることになる。

ここまでの議論を英語学習者の側から考えると、動詞に後続する名詞句に本来兼ね備わっている属性とは異なる結果状態を表す述語を選択することを学ぶことが大切になる。(13)の例のように、どのような名詞句と形容詞が結びつくのか理解するためには、意味制約に学習者の意識を集中させるある種のパターンプラクティスが必要になる。

- (13) I talked my tongue sore and my throat hoarse.

極端な結果状態(変件事象の終点)を表す述語として前置詞句が選択される場合、これまで見てきた名詞句を補部にとる形に加えて、-ing が後続する形も存在する。

- (14) a. Gruening talked him out of leaving Alaska for Berkeley.  
(www.iser.uaa.alaska.edu/iser50/adn-2010.pdf)  
b. Vikes talked him out of retirement...  
(sci.rutgers.edu)

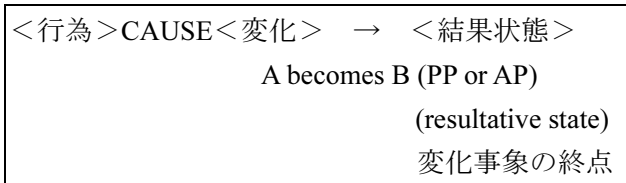
(14)の例は、平成22年度のセンター試験(英語)においても取り上げられた表現と同種の表現である。センター試験においては、(15)のように、(14)の形に受動化が適用された例が出題されている。このことは、高校までの英語学習において、日常的に用いられている自動詞を含む派生的結果構文を習得しておく必要があること、及び、自動詞 talk に後続する名詞句には受動化の適用が可能であることを理解しておく必要があることを示唆している。

- (15) John Kelley wrote in his preface to General Topology that he was talked out of using a title in parody of a series of her essays...  
(robotics.caltech.edu/~mason/packets/far-risbo.tx)

2節での議論をまとめると、英語学習者は、結果構文のイメージ図として(16)を理解することが

必要ということになる。(16)の構文イメージ図を理解し、表現練習を行うと結果構文に類する構文を応用した表現が可能になる。

(16)



### 3. 結果構文に類する構文への応用

3 節では、結果構文のイメージ図の理解が関連する他の構文へ応用できることを明らかにする。還元すると、関連構文を結果構文イメージの拡張としてとらえることが可能になることを示すことになる。

#### 3.1 使役移動構文

英語には、(17)に示す使役移動構文が存在する。

- (17) a. They laughed the poor guy out of the room.  
 b. Frank sneezed the tissue off the table.  
 (Goldberg (1995: 152))

使役移動構文では、動詞が表す行為の影響が動詞に後続する位置を占める変化の主体に及び、結果状態としてその主体が別の位置へ移動するという行為連鎖を持っている。(17a)の解釈は、彼らが笑うことによって、結果として、ステージにたった人物がステージを降りるに至ったという解釈になる。他方、(17b)では、フランクがくしゃみをするによって、テーブル上のティッシュがテーブルから飛ばされたという解釈になる。結果構文と同様に、位置変化が生じる主体に本来的に備わっている属性とは異なる状態が結果述語として選択されている。このことは、使役移動構文において、結果の述語が位置変化の終点、すなわち、アスペクト特性を表していることになる。この点において、結果構文と使役移動構文との類似性が見てとれる。

また、位置変化が生じるかどうかは、変化の主体と行為作用の力関係に起因する。これは、変化

の主体が変化を十分に起こしうる対象として存在しなければならない結果構文の場合に類似している。

- (18) a. ??The audience smiled the poor guy off the stage.  
 b. ??Frank belched the napkin off the table.  
 (Boas (2003: 111))

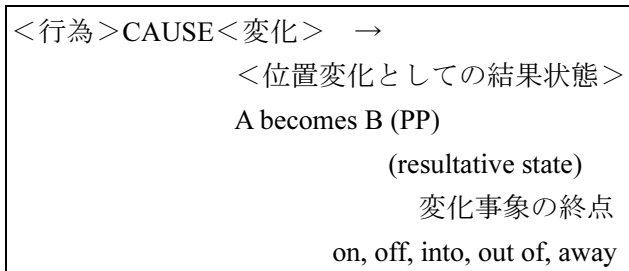
(18b)を例に考えると、フランクが、げっぷをすることによってナプキンがテーブルから飛ばされるという状況を想定することは困難である。このように、行為と結果状態に関して十分な CAUSE 関係が想定しにくい状況では、英文の容認度は下がることになる。(18)との比較で(19)を考察してみよう。

- (19) a. A sudden breeze blew the smoke into the house.  
 b. The wind blew the clouds away.  
 c. She ran Tom off the street.

(18)の例と異なり、(19)では CAUSE 関係が想定しやすい。(19)は、突然そよ風が吹いて、その場、もしくは近くで立ち上っていた煙が家の中に入ったという状況で用いられている。したがって、CAUSE 関係が成立し、いずれの例も容認されると考えられる。

英語学習者は、(16)のイメージ図の拡張として(20)を理解すればよいことになる。(16)と(20)の違いは、結果状態が位置変化であることと結果述語として生起する代表的前置詞句が off, into, out of, away などであることである。

(20)



### 3.2 Time-away 構文

英語には、(21)に示す Time-away 構文と呼ばれる構文が存在する。

- (21) a. We talked the night away.  
 b. We danced the afternoon away.  
 c. I slept the morning away.

Time-away 構文には、自動詞が選択され、変化の主体は特定の時間を示す表現、時間的縛りを伴う表現が選択される。時間的縛りをもつ表現であるということは、(22)のような時間的縛りを表すことができない表現は生起できないということである。また、時間的縛りをもつ表現かどうかは、It take NP<sub>time</sub> 構文に生起できるかどうかでテストすることが可能である。Croft and Cruse (2004)によると、問題の構文の連鎖（動詞—time 表現—away の連鎖）は、It take NP<sub>time</sub> 構文に生起できる。したがって、time 表現は、時間的縛りをもつ表現であると言える。

- (22) ??John danced the time away.  
 (Nishihara 2010:191))

- (23) a. \*It took a month for Louis and Clark to finally get to dance away.  
 b. It took a month for Louis and Clark to finally get to **dance two blissful hours away**.  
 (Croft and Cruse (2004: 246))

Time-away 構文も結果の述語である away が省略される場合、変化の主体が省略される場合は容認されない。また、変化の主体である名詞句は受動化の適用を受ける。これらの特徴を示す例として (24)(25)を挙げる。

- (24) a. \*We talked away.  
 b. \*We talked the night.  
 (25) In the course of the summer, many happy evenings were drunk away by the students before they finally realized that there was serious work

to be done.

以上のように、Time-away 構文と結果構文は統語的振る舞いから見ても類似の構文であると言える。西原(2010)が指摘するように、Time-away 構文は、結果構文の拡張であるとみなすことが可能である。Jackendoff (1997)によると、(26)の文は、二通りの解釈が可能である。可能な二通りの解釈を (27)として挙げる。

- (26) Bill gambled his life away.  
 (27) a. Bill has spent his whole life gambling.  
 b. Bill has bet his wife and lost (he ends up perhaps submitting to slavery or killing himself).

(27a)が Time-away 構文の解釈を示し、(27b)が結果構文の解釈を示している。これらの事実から、Time-away 構文は、結果構文の拡張とみなすことができる。(14)で示したイメージ図における変化の主体が時間的縛りをもつ time 表現であり、結果状態を away が表していることになる。したがって、英語学習者は、(14)のイメージ図の拡張として(28)を理解し、それを英語表現として応用することが求められることになる。

(28)

<行為>CAUSE<変化>	→	<結果状態>
		時間的縛りが
		ある時間表現
		away

### 3.3 位置変化、状態変化を伴うその他の構文

最後に、位置変化、状態変化を伴う文で Goldberg(1995)が力的ダイナミック(force-dynamic)動詞と呼ぶ allow, let, free, release や援助を示す動詞郡 help, assist, guide, show, walk が用いられた場合の構文に関して考察する。

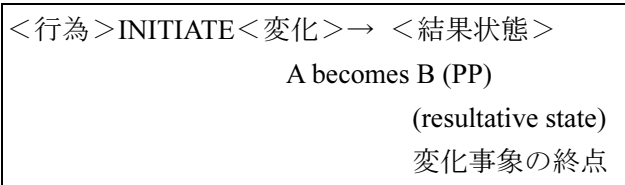
- (29) a. Sam allowed Bob out of the room.  
 b. Sam let Bill into the room.  
 (Goldberg (1995 161))

- (30) a. Harry locked Joe into the bathroom.  
b. Sam barricaded him out of the room.

- (31) a. Sam helped him into the car.  
b. Sam assisted her out of the room.  
c. Sam guided him through the terrain.  
d. Sam showed him into the living room.  
e. Sam walked him to the car.

(29)–(31)に示した例では、いずれも主語が動作・行為のすべての段階にわたって直接関与しながら、目的語を制御して、ある位置に物理的移動をさせている例である。この意味において、使役移動構文に含まれる出来事事象に近く、イメージ図としては(16)を援用することが可能であると考えられる。しかしながら、ここで注意すべき点は、(29)–(30)の用例では、直接的な CAUSE 関係は見られない。例えば、手助けをする(help, assist)や何かに導く(guide)場合、行為そのものがある場所への移動を直接引き起こしているとは考えられない。行為は、位置変化のきっかけをつくっていると言える。使役移動構文との意味的差異をとらえるために、丸田(1998)、中村(2003)に従い、位置・状態変化のきっかけを表す意味要素として INITIATE を仮定する。この仮定をもとに(16)を援用したイメージ図が(32)になる。英語学習者は、(32)を理解し、応用することで表現力をのばすことができる。

(32)



#### 4. 英語表現学習への応用

4節では、3節までの結果構文、及び行為連鎖を共有する各種構文の生産性に着目した英語表現指導の在り方について考察する。

伝統的な学校英文法では、トップダウン的な文構造を創り出すことが求められるが、ここでは逆にボトムアッププロセスが重要であることを示

す。このボトムアッププロセスは、近年の生成文法の理論的枠組みに合致しているだけでなく、第一言語習得の過程にも合致した考えであることを強調しておきたい。

まず、行為連鎖を表すイメージ図の中の<変化>→<結果状態>を表す部分に着目し、AはBであるという関係、AがBという終点的結果状態という関係を構築する作業から始める。換言すると、A=B(終点的結果状態)を構築させることになる。このA=Bという図式は、幼児の英語表現にも見られるものであり、早期に習得されるものである。例えば、父親が寝ている状況にある場合、幼児は(32)のような発話をするのが報告されている。

(32) Daddy sleeping.

結果構文、及び行為連鎖を共有する各種構文の生産性を利用した表現力向上には、先に述べた図式理解が有益である。例えば、(33)に示すような例を学習者に最初に創り出させるのが有益である。

(33) the hangover	off
the food	off
the napkin	off (the table)
the morning	away
myself / the boy	awake
himself	blue in the face
my tongue	sore
the man	into / out of the room

(33)に示した結果状態をもたらした行為をSVの形で挿入させるのが次の指導フェイズになる。

(34)	the hangover	off
	the food	off
行為	the napkin	off (the table)
(S+V)	the morning	away
	myself / the boy	awake
	himself	blue in the face
	my tongue	sore

## (35) 行為

(S+V)

(Sleep)	the hangover	off.
(Walk)	the food	off.
(I sneezed)	the napkin	off (the table).
(I knitted)	the morning	away.
(I shook)	myself / the boy	awake.
(I talked)	himself	blue in the face.

(33)(34)で示した段階別指導を通して、学習者は結果構文、及び行為連鎖を共有する各種構文を利用した文を生成できるようになる。ここで指導者が注意すべき点は、英語学習者が容認されない文を過剰生成する場合である。容認性に関しては、英語母語話者の間で判断が分かれる場合と完全に非文となる場合が考えられる。前者では、母語話者によっては容認されない危険性を伝えることが必要になる。例えば、(36)を例に考えてみよう。

(36) a. \*He opened the old man into the room.

b. %I convinced him into the Golden BBQ Chinese Restaurant by reading to him the review from our Lonely Planet guide...  
(www.Travelblog.org/Oceania/Australlia/Western.../blog-500337.html)

(36a)は、非文であるが、(36b)は英語母語話者によって判断が異なる。Goldberg (1995)は、(36b)に類する表現は容認されないと指摘している。しかしながら、コーパス検索では(36b)の文は検索可能であるし、Google News Archive には、類例が存在する。そこで、英語指導者は、persuade, convince の類は、学習者の注意を喚起する必要がある。また、(36a)のように、非文となる例を学習者が生成した場合は、ポイントがどこに求められるかを解説する必要がある。(36a)の場合のポイントは、二つの出来事事象の連続性に求めることができる。彼がドアを開けるという行為が、おじいさんが部屋に入ることの直接的な要因とはなっていないし、きっかけにもなりえない。換言すれば、意味要素としての CAUSE や INITIATE が想定できない。このように、英語指導者は、出来事事象の連続性が確

保され、影響を与えるきっかけをつくっているという状況設定が想定できるかどうかをポイントとして伝える必要がある。

次に、本稿でふれた段階的指導が他の構文にも応用できることにふれたい。A=B という関係を含む英文は、中学校・高校期の英語学習にも頻繁に顔を出す意味関係である。(33)の応用について考えてみよう。(37)–(39)は、(33)–(35)と同じ理解、同じ文の組み立てで良いことがわかる。

(37) the door	open
me	awake
me	sleepy
the boy	swimming

(38) 行為	the door	open
(S+V)	me	awake
	me	sleepy
	the boy	swimming

(39) 行為			
(S+V)			
(Leave)	the door	open.	
(Strong coffee keeps)	me	awake.	
(The story made)	me	sleepy.	
(I saw)	the boy	swimming.	

文型に基づく文構成パターンの認識は、トップダウンであり、学習側の文解析に負荷をかけるだけでなく、文を創り出す作業に必ずしも有益ではない。本稿で示したように、構文の基本的意味関係を示したイメージ図を理解し、その中に含まれる基本的意味にしたがってボトムアップ式に文をつくるほうが容易である。詳しい統計的分析は別稿にゆだねるが、上記の方法を提示した学生は、平均して提示しなかった学生の三分の一以下の時間で文を創り出すことができた。これは、ボトムアップ式の有用性を示唆するものである。今後、コントロールグループをつくり、被験者の英語レベルを統一して、統計的分析を行いたい。

最後に、A=B という関係をとらえることができない大学生に関するエピソードを挙げたい。おも

ちゃを販売しているトイザラスの英語表記は、TOYS”Я”US.である。この意味を学生に尋ねると、幼児の鏡文字を反映しているという回答がかえってくる。では、なぜЯに引用句のしるしがあるかと尋ねると、回答が得られない。Яは、areと同じ音であり、その短縮形で表現すると、Toys’re us.になること、ここでのbe動詞はイコール関係を表し、「おもちゃ=自分たちのところ」というメッセージがあることを説明すると、驚きの声があがる。この事実は、いかに基本的意味関係を表すA=Bがなおざりにされているかがわかる。今後、基本的意味関係にも配慮しつつ、学生の英語表現能力の向上を図るための指導方法についてさらに検討を加えていきたい。

#### 参考文献

- 1) Boas C. Hans, *A Constructional Approach to Resultatives*, CSLI, Stanford, (2003)
- 2) Croft William and Alan Cruse, *Cognitive Linguistics*, Cambridge University Press, Cambridge, (2004)
- 3) Goldberg, E. Adele, *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*, University of Chicago Press, Chicago, (1995)
- 4) Jackendoff, Ray “Twistin’ the Night Away,” *Language* 73, 534-559, (1997)
- 5) 影山 太郎 編 『日英対照動詞の意味と構文』大修館 東京 (2001)
- 6) 丸田 忠雄 『使役動詞のアナトミー –語彙的使役動詞の概念構造–』松柏社 東京 (1998)
- 7) 中村 捷 『意味論』開拓社東京 (2003)
- 8) 西原俊明「Time-away 構文について」, *JELS* 27, 187-196. (2010)